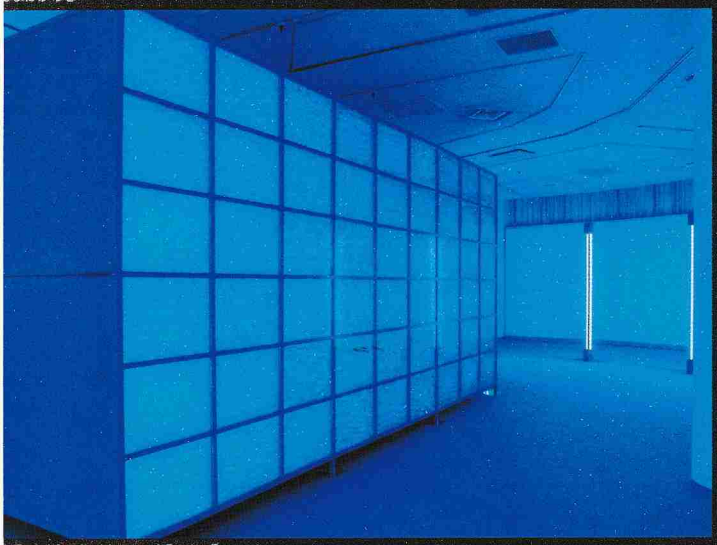
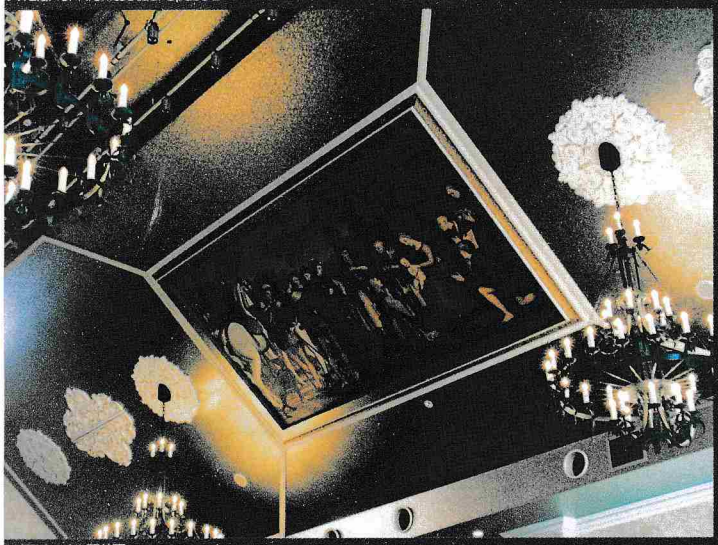
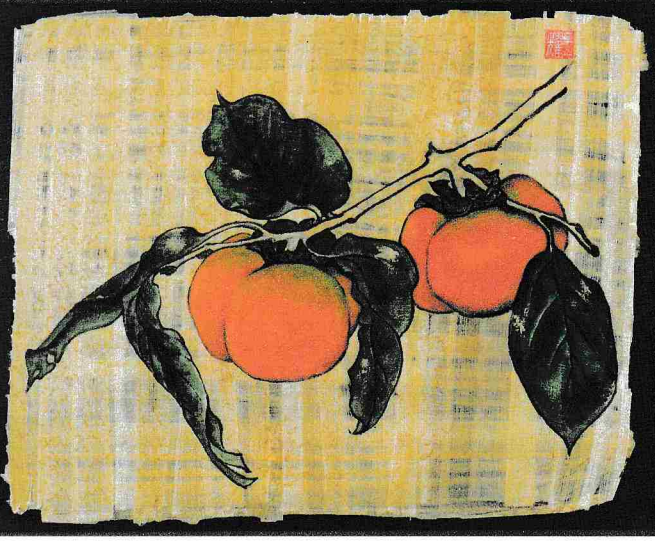
なまはげの心



A Tralal for Architectual Space II



マリアチャペル天井画



ぁ

NO.31 2000.3

aaca

社団法人 日本建築美術工芸協会

アピアランス

aaca会員／㈱大理石モザイク・上　代表取締役
大理石モザイク作家
TETSUO UE
上　哲夫
東京都国分寺市東恋ヶ窪6-21-18
TEL042-322-4973

「なまはげの心」
設置場所：秋田県男鹿市北浦真山学水喰沢
“なまはげ館”
2700㎜H×2700㎜W×2700㎜D

看板の予算で始めた仕事でしたが、終わってみると付けていた“なまはげ館”の文字は近くの石垣に移り、スッキリとしたモニュメントとして杉の木々の間からなまはげの精神を人々に語りかけることになりました。

aaca会員
Glass Artist
SHOKO KASAHARA
笠原　祥子
鎌倉市梶原5-2-C1-102
TEL0467-44-8303

「A Traial for Architectual SpaceⅡ」
2600㎜H×5460㎜W×1200㎜D

'98年「ギャラリー日鉱」での個展の作品である。“新しいデザインの建築に適った新しいグラスアート”をと提案してきた中の一つの表現である。構造体の各グリッドに技法の異なる3枚のガラスを嵌め、2種のランプで表現を変える。

aaca会員
壁画家
TAKAHIRO KAMIOKA
上岡　高廣
東京都府中市岩松町1-11-27
TEL042-362-4301

「マリアチャペル天井画」
設置場所：千葉県柏玉姫殿　マリアチャペル
2700㎜H×6000㎜W　1対組

結婚式用の教会に応しい内容の絵を依頼され制作した。クライアントの希望を出来るだけ取り込みながら天井の色調に合わせて仕上げた。

aaca会員
日本画家
MIYOH YAMADA
山田　三耀
東京都目黒区三田1-4-3
恵比寿ガーデンテラス壱番館1308
TEL03-5421-1308

「晩秋」
軸物 8P（455㎜H×333㎜W）

エジプト5000年昔そのままの古代紙による企画展で出品したものの一枚です。岩絵具も墨も受けつけないこのアンペラみたいな厄介な板(？)に苦労してやっと日本画らしき軸物に仕上げをほどこす事が出来ました。

CONTENTS

第9回aaca賞 ……1
「文化・芸術と都市空間」……5
aacaトーク ……8
時代の華一輪 ……9

■表紙デザイン
高部　多恵子

表紙の作品を募集しています。
事務局までお問い合せ下さい。
尚表紙のレイアウトは、広報委員会で行いますのでご了承下さい。

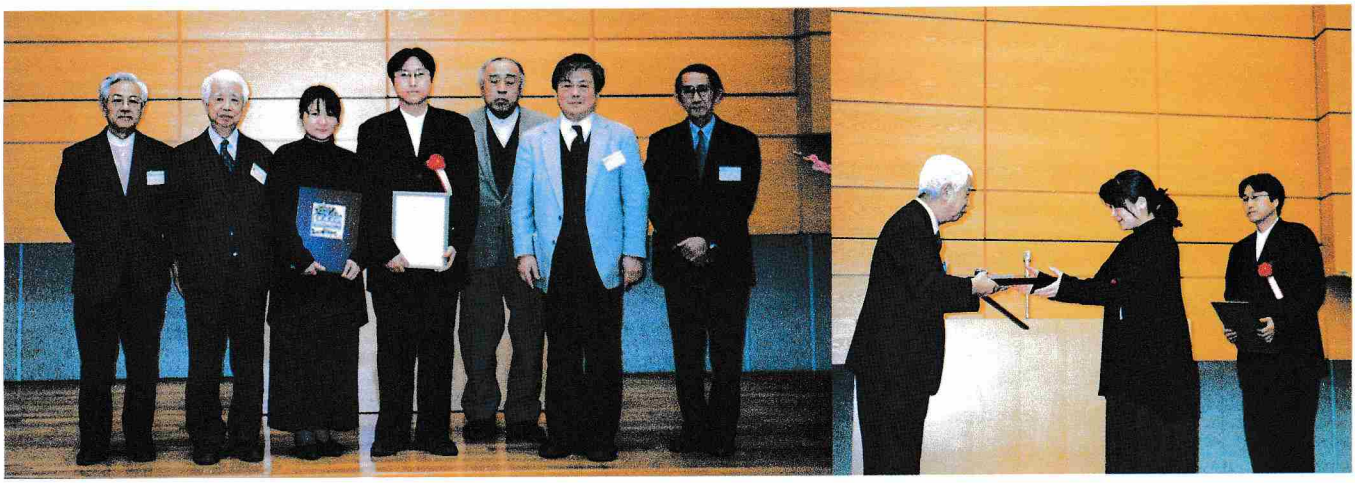
発行：社団法人日本建築美術工芸協会
Phone 03-3457-7998
Fax　03-3457-1598
〒108-0014
東京都港区芝5-26-20
建築会館6F

振替：東京 1-365085

編集：(社)日本建築美術工芸協会　広報委員会
広報担当理事　柳澤孝彦
委　員　長　玉見　満
副 委 員 長　高部多恵子
冨田俊男、北村孝昭、石田眞人
渡部毅志、高塚信吾、山埼輝子
事 務 局 長　伊藤留雄

制作協力：㈱SP建材エージェンシー

社団法人日本建築美術工芸協会　第9回AACA賞



審査委員長　内井　昭蔵
審査委員　曾田　雄亮
榮久庵憲司
近江　栄
澄川　喜一
ゲスト審査員　村井　修

審査総評

◇審査経過

㈳日本建築美術工芸協会(AACA)では毎年、この会の役立の趣旨に合致したすぐれた芸術的環境をつくった作品に対し、㈳日本建築美術工芸協会賞(AACA賞)を贈り、表彰してきました。

又、AACA特別賞はすぐれた芸術的環境形成に対し支援し、協力して、功績のあった個人、又は団体に贈る賞であります。

本年は回を重ね、9回となります。応募の総数は本年はやや少なく19点でありました。審査員一同、慎重に審議をして候補作品を絞り、現地審査を行い、最終選考会において「SPRINGTECTURE播磨（播磨科学公園都市公園管理施設）」設計者・兵庫県企業庁都市整備局科学公園都市整備課＋遠藤秀平建築研究所を選定し、AACA賞を贈呈することに決定いたしました。なお、特別賞は本年は残念ながら該当作品無しとなりました。

◇審査内容

AACA賞候補作品として残ったのは

1．東京湾アクアラインの「モニュメント」
　日本道路公団東京建設局、東京湾横断道路㈱
2．SPRINGTECTURE　播磨
　（播磨科学公園都市公園管理施設）
　兵庫県企業庁都市整備局科学公園都市整備課＋遠藤秀平建築研究所
3．香北町立やなせたかし記念館
　（アンパンマンミュージアム＋詩とメルヘン絵本館）
　香北町・古谷誠章＋八木佐千子／スタジオナスカ
　藤江和子、坂東孝明

でありました。

審査の結果、工業製品であるコルゲート銅板をあたかも紙の如く扱い自由な曲面をつくり、公衆便所の機能を満たし、みごとな環境造形としてまとめられたSPRINGTECTURE播磨を全員一致でAACA賞に推すことに決定しました。

香北町立やなせたかし記念館は、まことにすぐれた建築作品との評価がありましたが、AACA賞的な視点からみると環境との関連性に今一つ追求がほしかったという意見があり、大変残念なことに賞を逸したのであります。

なお、東京湾アクアラインの「モニュメント」は澄川先生の作品が中心となっており、先生が審査員をしておられる関係から今回は辞退されるとのことで審査の対象から外すこととなりました。

又、特別賞候補作品としては

1．大塚国際美術館
　大塚正士（大塚国際美術館）
　阪田誠造（坂倉建築研究所）
2．和歌山県立医科大学アートワークプロジェクト
　アートアソシエイツ八咫・坂上直哉、露口典子、倉本紀久子

以上の2点でありました。

大塚国際美術館は最初から賛否両論があり、意見が対立した作品であります。大塚オーミ陶業㈱の陶板複写技術が精巧ですばらしいことはすべての審査員が認めるところですが、世界の歴史的作品のコピーが果たして芸術であるのかという疑問が出されました。これに対し芸術、美術の教育普及という面では高く評価できるという意見が出されましたが、NHKのハイビジョンのように「もの」としてではなく情報化された場合はともかくとして大塚国際美術館の場合は原寸であり、「あまりにも実物と似すぎているだけに本物とまぎらわしいのでは」といった意見が強く出されました。要するに芸術性とはオリジナリティーが一番問題でありますが、果たしてこの点如何なものかといった疑問であります。一方、純粋さを求めることのみが果たしてこれからのアートの行き方なのか、といった疑問も出され、白熱した議論の末、多数決で決することにしました。その結果、否定的な意見が多く、今回は該当作品無しと決まったわけであります。

又、和歌山県立医科大学アートワークプロジェクトについてはアートのコーディネートに大変なエネルギーを掛けたプロジェクトで、その情熱に審査員は感動したのでありますが、アートのプロデュース的作品は過去にも表彰された例があり、これらと比較すると今一歩のところではないかとも思われ、惜しくも賞を逸したのであります。今後さらなる挑戦を期待したいと思います。

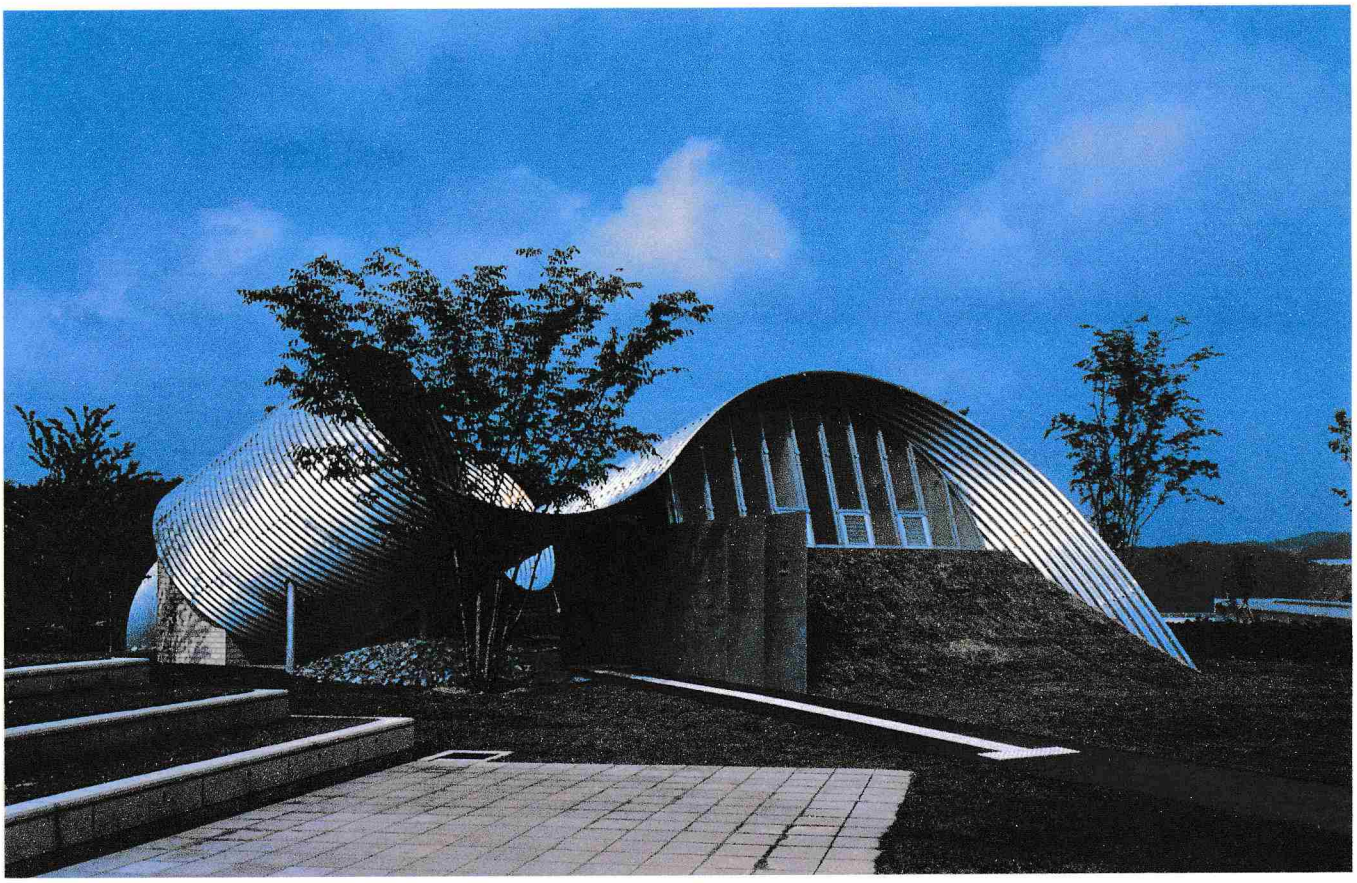
別紙において審査講評がありますので、御参照下されば幸いであります。

今後ともこの賞を大切に育てて下さいますよう心よりお願い申し上げ、審査総評といたします。

（審査委員長　内井昭蔵）

AACA賞

対象件名：SPRINGTECTURE　播磨（播磨科学公園都市公園管理施設）
受 賞 者：兵庫県企業庁都市整備局科学公園都市整備課＋遠藤秀平建築研究所



広場側エントランスを見る（撮影：松村芳治）

審査講評

作者は近年コルゲート銅板という工業品の特性を生かしたシリーズで、抽象彫刻的フォルムの創造に挑戦して、すでに米原駅前の駐輪場などで注目され、いくつかの賞を受けているのは、その伸びやかな構成力を駆使した意欲的な実験だからであろう。

安藤忠雄氏の設計した相似形の小学校と中学校の間に設けられた屋外ひろばに格好な敷地を与えられ、子供達にとっては公衆便所のイメージを忘れてアプローチしたくなる造形に魅きっけられるだろう。

解体移動も可能であるディテールが工夫されているが、空に向けた開口部のために、暗い空間はないが、WCの扉が灰色に抑えられたのは残念で、形態にふさわしい明るい彩色が好ましかったのではと思った。部分的に煉瓦を積上げた間仕切りとの対比は好ましい。

小学校から西側を見る

こうした建築としての機能を考慮したうえで、遊び感覚を導入した提案を受容したクライアントの決断も、子供たちへの環境づくりの成果として多くの審査員の高い評価を集めた。　（近江　栄）

■AACA賞候補作品：香北町立やなせたかし記念館

アンパンマンミュージアムのアプローチブリッジと正面外観

詩とメルヘン絵本館のギャラリー内観

審査講評

香北町立やなせたかし記念館
A.「アンパンマンミュージアム」＋
B.「詩とメルヘン絵本館」
香北町・古谷誠章＋八木佐千子／
スタジオナスカ
藤江和子、坂東孝明

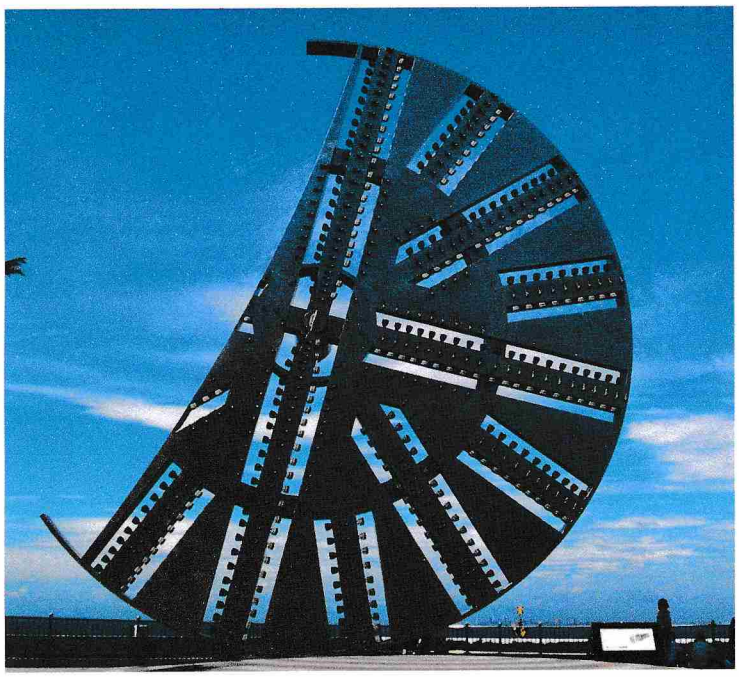
A、B、2棟の建築それぞれが、自然の森を背景として、漫画家　やなせたかし氏の子供に託そうとする夢が、内部の随所に計られており、その細かい配慮が大人へも興味をさそう記念館となっている。

特に建築としてAのエントランスホールを、パフォーマンスを演ずる場として、客席ともなる大階段の設置や、Bの内部にスリットから差し込む静かな光が連なる空間、そして中央に藤江和子氏のユニークな階段が立ちあがるなど、展示の内容とよく調和された建築であると思われる。

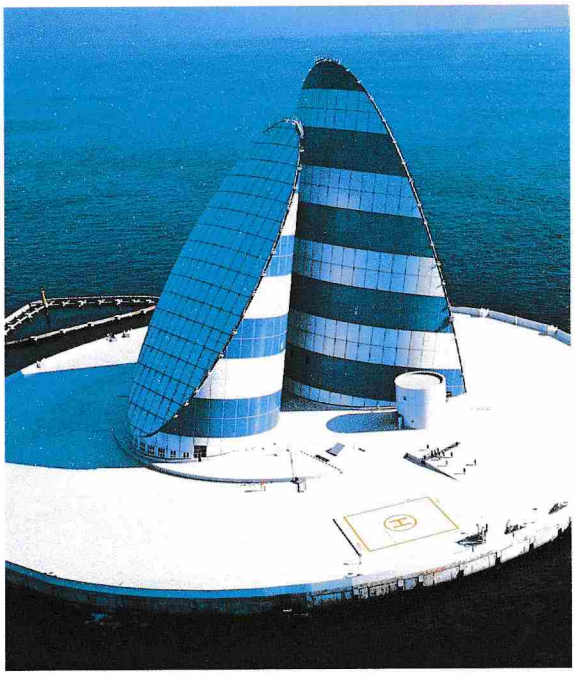
しかし、美術館、記念館の建築が、本来展示物との関係で成り立つことを考えると、評価は建築サイドの問題ではないかと思われ、AACA賞の特質とする建築・美術・工芸が相互に関わりながら、新しい空間を創造するという視点に立つとき、問題を残しているように思われた。

（ゲスト審査員　村井　修）

■AACA賞候補作品：東京湾アクアライン「モニュメント」



カッターフェイスのモニュメント



風の塔

■特別賞候補作品：和歌山県立医科大学アートプロジェクト

「紀国山海宝船」現代熊楠マンダラー

審査講評

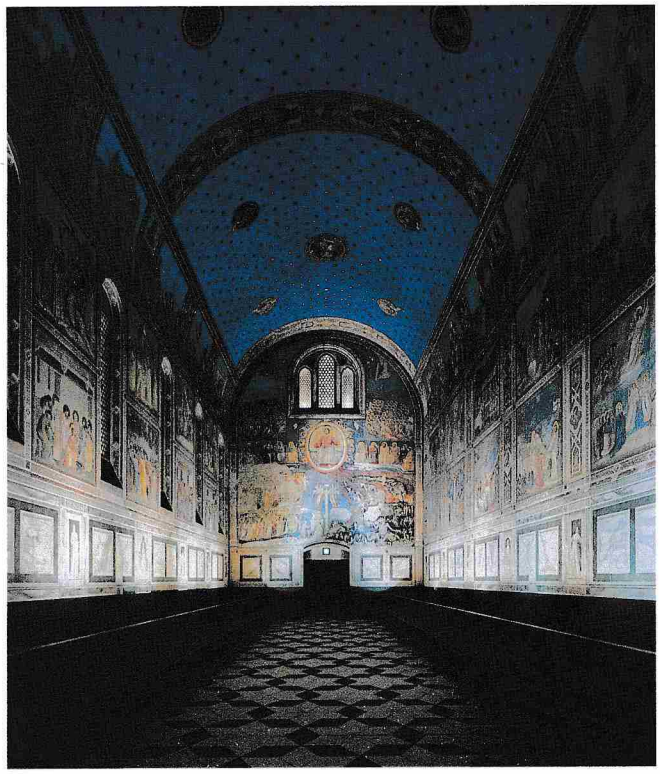
和歌山県立医科大学アートワークプロジェクト
アートアソシエイツ八咫・坂上直哉、露口典子、倉本紀久子

自然環境・都市環境や建築空間にあってアートの存在の意味はようやく一般社会に理解されてきたように思われます。

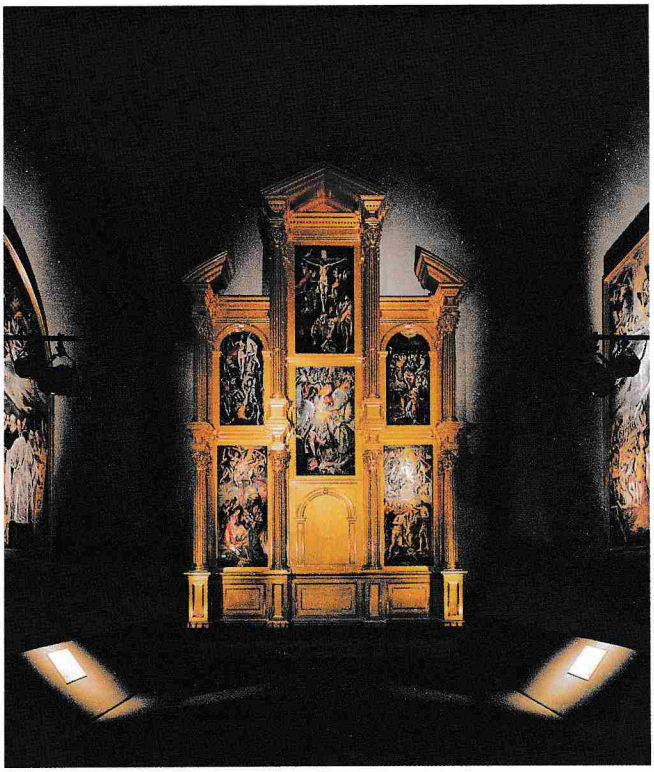
美術館や床の間に置かれる目的ではなくアートは制作そのものはもとより制作のプロセスにあって多くの人々と関わり合いを持ち、精神や身体のコミュニケーションを創出することが現代的意義といえるでしょう。

アートは環境を機能する重要なファクターであり、全体にとって欠くべからざるものといえます。このことはアート自体の高い自立性、独立性が前提となります。アートプロデュース、アートコーディネートといった作業はアートと自然、アートと都市、アートと建築、アートとインテリアをつなぐ重要な役割であります。アートアソシエイツ八咫の人々は使命感を持ち、情熱をもって和歌山医科大学のキャンパス空間をアートでまとめる努力をされました。「プロデュースノート」「和歌山めぐり」「合宿FAX交信」などのアーティスト同志の交流、関わりを大切にアート環境づくりをされたことは、芸術的環境形成支援の新しい試みとして高く評価するものであります。　（内井昭蔵）

■特別賞候補作品：大塚国際美術館



スクロヴェーニ礼拝堂壁画



エルグレコの祭壇衝立復元

「文化・芸術と都市空間」

調査研究委員会

和の国の都市空間と神（ARTから芸能へ）

以前aacaの企画協力で出版された本『景観を創る人びと』のなかで茶の湯について触れた。「一期一会、命を賭けて遊ぶのですから日本人は面白い民族です。しかし、それは茶碗の見込みに広がる私たちの祖形としての森を飲み干すのですから、その位の心構えは必要です」と書いた。見込みに広がる祖形の森の奥、その彼方に、古戦場としての大海原がみえてくる。大和の国の成り立ち、芸能の悲しみや戦い、大海原へと続く水と火、海と大地の間に俳優（ワザオギの）道が見えてくる。

■湯立神楽

茶の湯は釜で水を湯に立てる事から始まる。同様に湯を沸すことが重要な儀式に湯立神楽（伊勢系）がある。四隅に竹を立て、注連を張り、神座が作られる。舞庭の竈に終夜、火が焚かれ、神を招き、楽を奏で神哥をうたい、神酒を湯に注ぎ、舞をまい、神の籠った湯を参詣者にふりかけ湯立ての清めをする。湯立神楽は火と水の儀礼、火と水の結婚。古代から月と女神と水は豊穣の象徴だった。

火、焔、太陽は水の可能性に命を与える。上古の民は太陽に神を見、太陽の子、火の暖かさが発芽を呼起し、作物の豊穣へと繋がる。

水は森の奥深きから湧き、ほとばしり、渦を巻き、一筋の流れから川となり、瑞穂の国を去り、大海へと注いでいく。

記紀では「山の禊」「川の禊」「海の禊」が書かれている。常民の暮しの文化は日々の営みの成される処から生じ、神と共に在る芸能は大海の彼方から長い時をかけて渡って来た。黒潮の流れは朝鮮半島、中国大陸に繋がり、南へは南海諸島への海道でもある。

■神殺し

伊勢神宮の創建されるずっと昔、伊勢地方の海人族の奉斎した土着神、猿田彦神は火の神、太陽神（プレアマテラスと言われている）だった。様々な日本芸能の母体となる。猿田彦神は、大陸より稲作文明をもたらした天孫族の神武東征に際し、向かい出て服従を誓い、伊勢国を国譲りした後、ひぶら具に手を食われて溺れ沈んだ。

出雲でも海人族の神、事代主神（エビス）が柴垣の船を踏み傾け海に沈むことにより、天孫族に服従した。

南九州の海人族（隼人）海の幸彦は弟の（天孫族）山の幸彦に溺れさせられ俳優（ワザオギ）の民になることを誓い許された。

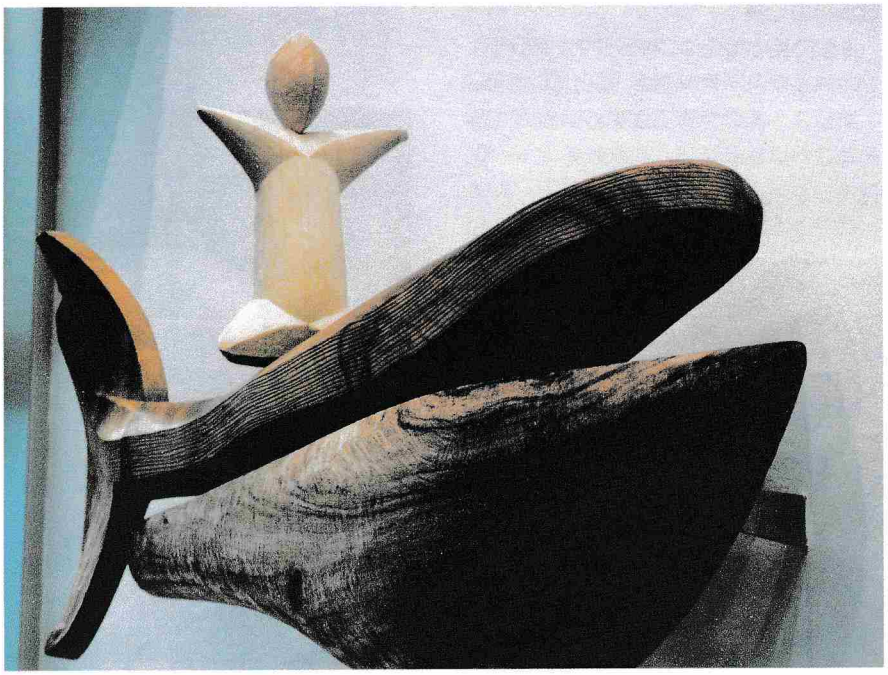
大海原をフィールドする全ての海人族が海中に沈み、稲作文明をもたらした天孫族が大和の国を治めるようになった。この抹殺されたかのように見える海人族の全ての神々は、神楽、散楽、猿楽、人形まわしと何故か芸能を司っている。又、室町中期頃から招福芸能としてもてはやされた七福神の内、エビス以外は全て外国生まれの神。そのエビスも「戎」「夷子」とも書き、渡来神の様にも見える。記紀神話でエビスは、天照大御神の姉で、三才になっても脚が立たず、葦舟に入れて海に流された姪子（ヒルコ、エビス）後に西宮の沖に光り物となって漁師の網にかかり、偉大な蛭子神、夷子神となり復活した。さらに、美保神社の事代主神や伊雑宮の和歌の神、和歌姫までエビスとされている。エビスは最も謎の多い神だが、海の民と芸能に深く関係し、日本芸能の基層を成している。

■傀儡子（クグツシ）

国東の宇佐八幡、出雲の美保神社、摂津西宮神社には傍儲子のルーツが見られる。エビス大神、夷子大神を祀る全国の総本宮で「西宮のえべっさん」の名で親しまれている西宮神社には、平安中期頃から海人族・傀儡子の徒が隷属し、大芸能集団を成していた。彼らは「くぐつ」と呼ばれ、後に夷かき、夷まわしとして町々、村々を「春駒」「獅子舞」「包胸」「厄払い」「大黒舞」「千秋万歳」などを携え、祝福芸人として門づけをして回り歩いた。そして近世初頭には日本芸能の神髄、人形浄瑠璃と能狂言を創性するに至る。

当時身分は、武士、長袖（宗教者）、平人に分れ、天皇、公家は上方に、くぐつたちの身分は下方、即ち穢穢多として扱われたが、天皇もくぐつも、制度の外の民であることは共通していた。それは両者ともケガレに深く関わっているからと考える。

平安時代後期（AD1100）、大江匡房（マサフサ）の「傀儡子記」によると、「くぐつまわしたちは決まった家もなく、守る家もない。男達は皆弓矢をよくし、狩猟で生活を立てるが、その他2本の剣を躍らせ、七つの玉を玩び、木製の人形を回し、木で作った人形に相撲を取らせたりする。これらの人形をまるで生きた人のように動かすのは幻術の様である。女達は化粧、歩き方笑顔に工夫を凝らし気をそそる歌を歌って男心をとろかす。春をひさぎ、客から錦の衣服、金のかんざしなどを喜んで受け取る。地方官の統治を受けず、戸籍のない人々である。上に王公のあるを知らず国守も恐れず、夜は多くの神々を祀って鼓を打ち舞をまい、神に助けを祈願する‥‥その哥の素晴ら



天児アマカツが安曇族のトーテムである鮫に乗って伊勢神宮の元宮、伊雑宮へのお参りの風景。

しさにそれを聞く者たちは冠の紐を感涙に濡らし気持ちを昂ぶらせる」

傀儡の女達は、一夜の契りを結び常民の罪やケガレを神主のお祓いに使う玉串や幣にまとわり付かせるように、その体の奥に染み込ませ、漂白の旅と共に祓い流したのではなかったのか。雛形、形代、撫物で、子供のケガレを雛形に移し、精霊流しで祓うように、傀儡の人形も、常民たちのケガレを祓ったのではなかったのか。傀儡子達はケガレを祓う呪力、神業を持っていると常民から信じられていた。何故なら、彼らの祓いの源である、全てを浄化する海の彼方から来た人々だから。

■細男舞（セイノオマイ）

細男舞は不思議な舞だ。多くの八幡系の諸社や、春日若宮のおん祭、宮中の御神楽に於ても秘儀の舞、不可思議な舞と言われ、何百年もの間休むことなく舞続けられている。神功皇后が三韓出兵で香椎の地に赴かれたとき、海中に住む安曇磯良（アズミノイソラ）を海の案内に召そうとしたがなかなか出てこないので、海中に舞台を作ると磯良は海中より浮かび上がってきた。長く海中にいたためその顔には牡蛎や鮑がびっしりと付いていたと言う伝承に由来している。

舞人は汚い顔を覆い隠すように白い布で顔を隠し、両手を挙げる動作を繰り返す。これは降参した姿でもあり、相手を讃える万歳の姿でもある。記紀にはその様をr手を挙げて溺れ困む」とある。細男舞は「舞台は石となりて海の中にはべりける」と哥われて終わる。これは傀儡達の祖霊、海人族の圧殺の歴史、服従の舞に他ならない。

民族として抑圧され、制度の外の民として舞続ける。これが日本の祝福芸の本質なのではないのか。稲作文化の精神の支柱と言える藤原氏や天皇家の祭りで、数百年に渡り休まず営々と舞われてきたのは、和の文化の奥深かさと、おそろしさではなかったのか。

『「わしどんな、二重国籍ばもっとりますもん」と。どう言ったらいいのか、あの人達は文字も知っているけれどいきいきした言霊の世界にいます。海は命の原初で自分もそこの一員だと光の満ちてくる顔で思っておられ、ですから、漁をすることは上古の神遊びの様にさえ見えます。制度のなかにいるけれど強固に自立していて、ああいう世界が日本人の精神の基層になっていたんですね』

（2. 16 朝日新聞　石牟礼道子氏）

石牟礼さんの語っている、神遊びのように見えた方は、おそらく漁師の杉本栄子さんや緒方正人さんも含む水俣公害で苦しまれた方々のことを話されているのだと推察する。5年程前の水俣での印象を思い起しました。同じ村人から糞尿を浴びせられ戸には釘を打たれ、痙攣は止めようにも止められず、芋虫のようにしか体を動かせなかったと言う話しをされながらも、その語りが神哥を歌っているような深さと佇まいを見せ、石牟礼さんの語る様にその場が聖域に変わっていきました。

今思うに水俣の公害にあった方々は海人族、安曇磯良（隼人）の子孫在り、深い意味で制度の外にも居て、この国の文化の湧水の民でもありました。

■和の国の美

大和の美の文化はニギミタマとアラミクマの共生する不可思議さ、面白さにある。

キリスト教の世界では美しいものは善でなければならない。西欧の美のルーツはギリシャとルネッサンスにある。美は善と真理の輝きだと考えられてきた。対して日本の神は二面性を持っている。荒々しい形相の荒魂アラミタマと優しい顔をした和魂ニギミタマがあり、それは自然の二面性でもある。キリスト教の悪魔は美しくは描けないが能や神楽においては鬼神さえ幽玄を欠いてはならないし、椎葉村の神楽では鬼さえ神哥を奉納する。大和の国の美意識は、邪鬼、妖怪、生き方にまで及んでいる。

日本の舞は、舞って舞って廻って輪舞し「無」となり万物と共鳴する。

近代の終焉も感じられる今、グローバル化の潮流の中で真にローカルな物や事、私たちの国の美の有様に心を手向けることにとても切実な時がきました。柔らかなアニミズム文化を色濃く持ち続けている日本人は、ユングの言うとこの人類が共有している普遍的無意識の世界に最も近いところにいるようです。

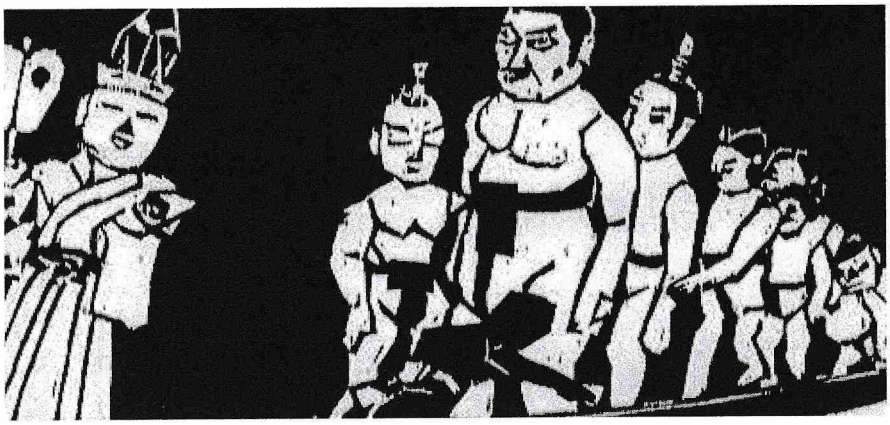
作家・坂上　直哉

去る、1月8日、調査委員会、委員長守屋秀夫氏がご逝去されました。

暮れ、日高邸で行われた忘年会の宴、「天国と地獄では、地獄の方が色々な道具もあるし、面白そうだ」等と、美酒を嗜みつつ笑談していた様子が目に浮かびます。守屋様の事ですから、地獄の楽しそうな様子を河原から眺め、そのあと、常世の世界に行かれているのでは、と思います。

心よりの、ご冥福をお祈り申し上げます。

調査研究委員会　一同



日本で最も古式な神事芸能「くぐつ」による神相撲（古要社）

縄文時代の風を最も残していると言われる推葉村の神楽

日本には各地に様々な人形芝居や動く人形が伝えられています。私は、江戸ー東京を中心に伝えられてきた糸あやつりの人形遣いです。結城座と云えばご存じの方もおられるでしょうが、私はここに入り、座が分かれたあとも含め13年間、11代結城孫三郎の元で修業し、'92年に独立しました。

ご存じのない方は写真を参照して頂きたいのですが、私どもの人形は、胴と手・足という基本の部分に頭(かしら)と衣裳を着けることによって、どんな役にもすることができます。そして基本的には15～6本ぐらいの糸が付き、人形の動きに応じて糸の数が増えたり減ったりします。その糸の上にあって糸を束ねているのが、手板(ていた)と呼ばれる四角い板です。この形は日本独特のものです。外国ではほとんどが棒を組み合わせた物を使っています。私どもの糸あやつり人形はこの四角い手板を使うことによって、世界に類を見ない程の繊細で感情豊かな表現を生み出すことができます。

私のいた結城座は、かなりのハイレベルの芝居を創っていましたが、糸あやつり人形というと文明堂のカステラのCMや、映画「サウンド・オブ・ミュージック」の劇中劇などが思い出されるように、なかなか知られておりません。糸あやつり人形の素晴らしさを広く知ってもらうには、どうすれば良いか。私はわざわざ劇場に人を呼ぶのではなく、生活している中に入って芝居を見せてしまおうと考えました。そして思いついたのが、大道芸でした。

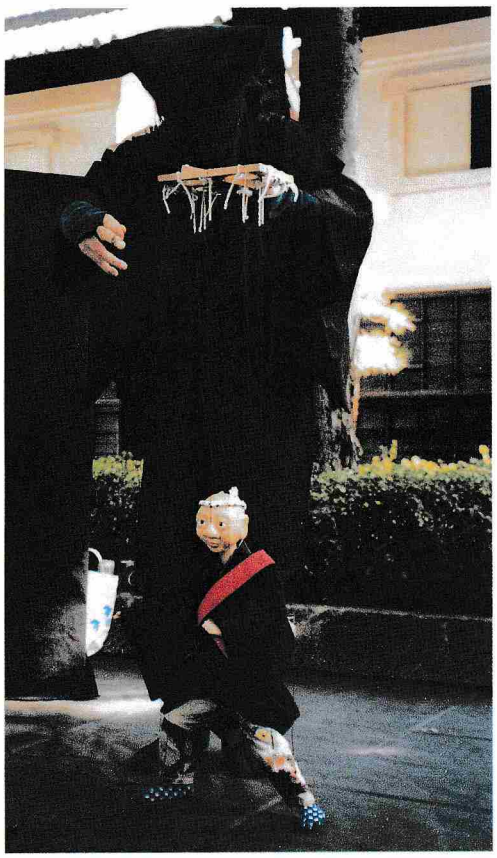
劇場の舞台に慣れていた私には、井の頭公園のような木の板が浮き、小石のある決して平らでない土のところで人形を遣うのが、苦痛でした。それは人形の足が地面の凸凹に付いていけず、崩れてしまうからだけではありません。遣っている私自身の足元が覚束なかったからです。しかし何日も出ているうち、ある日ふと自分がぐっと腰を落として人形を遣っているこに気付きました。いつも胸の高さで遣っている手板が、目の前にあったからです。そして私の足の指は地面を掴むように踏張っていました。その時私はあぁそうかと感じました。日本の芸能は土の上で戌り立ってきたのだ、農耕民族の芸能なのだと。

人形を吊っている木綿の糸は、湿度の変化に反応します。縒りがきつくなったり緩くなったりして思わぬ絡みを起こしたり、手に馴染まなかったりまとわり付いたりします。それも1日僅か2～3時間の大道芸の間に風向きが変わっても感触が変わります。また立ち止まって観てくださるお客様も、陽が陰ると少なくなり、また陽が出ると増え、私達は自然の流れの中にいるのだなとつくづく感じます。

ある日いつものように大道芸に出ていましたら、3つか4つぐらいの男の子が二人来て、真前で見始めました。そのうちに一人が「この人形、このおじさんが動かしているのだろうか」と私を見上げながらもう一人に聞いています。聞かれた子は私と人形を何度か見比べて「違うだろう」。その後黙って見ていましたが、踊りが終わって私が挨拶をしますと、二人同時に「やっぱりおじさんが動かしていたんだ」。子供達の反応は面白いものがあります。人形を一生懸命見て中には一緒に踊りだす子もいれば、人形を恐がって、小石を投げ付けたり棒で突こうとする子もいます。老人ホームで遣うこともあります。舞台の真前でご覧になっていたお年寄りに頼まれて、その方と人形が並ぶように写真を撮ったのですが、後で介護の方に伺うと、いつもはベッドから起き上がらない方だとか。良かったといっぱい感想を話していた男の方は、いつもは気難しくて介護の方に馴染まない方だったり、その日に食べた朝食も忘れる方が、半月たっても見た人形のことを覚えていて下さったり。人形って何なのか、私にはまだわかりません。

私は、文化はその地域の気候風土に規定されると思いますが、大道芸で気付いた「土」を大切に舞台を創っていこうと思っています。そうすれば外国の方と真の国際交流ができるのではないでしょうか。今年6月にはブラジル・アルゼンチン、10月にはパレスチナの公演が予定されています。ブラジルでは大道芸も予定されていますし、パレスチナでは、ベドウィンや難民のキャンプ地の砂漠の上での公演も依頼されています。各国の民がどう反応するのか楽しみでもあり、正直なところ不安でもあります。

操り人形師・上条　充



aaca運営委員
安井建築設計事務所　取締役社長
YOSHIHIKO SANO
佐野　吉彦
大阪市中央区島町2-4-7
TEL06-6943-1371

「出会いの場所の光と色」

トークのタイトルのなかに<出会い>ということばを入れたのは、<出会うことのときめき>とか、<出くわすおどろき>が世の中を変えてきたというメッセージを伝えたかったからでした。たしかに、建築の歴史をふりかえってみても、<出会い>や<発見>というものがおおきな意味を持っていることがわかります。

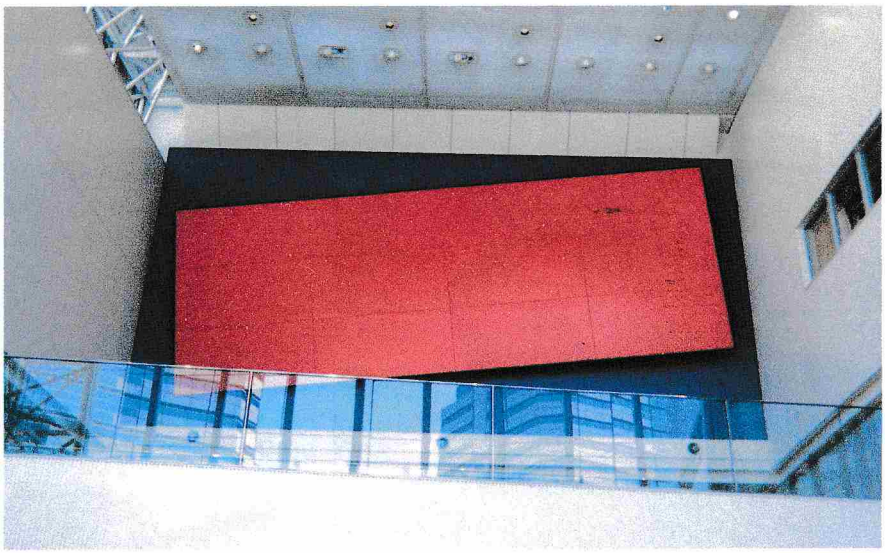
建築をめぐる出会いにはいろいろあります。まず、「クライアントと建築家との幸運な出会い」が生んだ名作の例を挙げると、ミース・ファン・デル・ローエのファンスワース邸（1950）のように、建築の歴史を転換させてしまう作品もあります。われわれの事務所の創業者・安井武雄がスタートを切れたのも、野村證券の創業者・野村徳七との出会いがあったからでした。それが大阪倶楽部（1924）やガスビル（1933）の誕生につながっているのです。

「ものをつくる同士の出会い」がお互いの力を引き出しあう、という例もあります。ホフマンが設計したストックレー邸（1911、ブリュッセル）も近代建築の傑作ですが、このなかに納められているクリムトの壁画とあいまってすぐれた内部空間を形成しています。サントリーホール（1986）にもそうした面がありました。当然ながら、それぞれが同じ方向を目指すことがきちんと了解されていなければなりません。

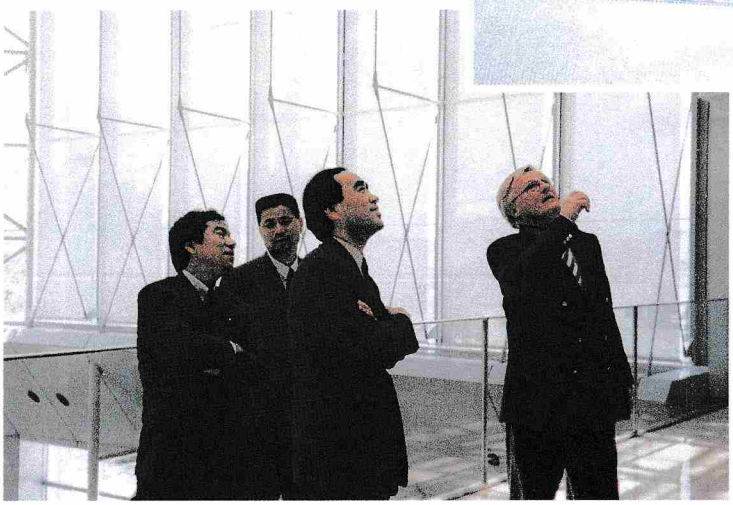
最近のわれわれの仕事のなかでは、有明パークビル（1999）におけるアーノルディ氏や草間吉雄氏のアートワークなどは、空間の意味とアートの役割を相互が理解したのうえの成果です。ここでのアートとエントランス空間は、人を出迎え、建築の全体のイメージと連動するものとして、存在しています。

那覇空港のターミナルビル（1999）は、那覇の宮平建築設計事務所との共同設計でしたが、さまざまな沖縄のアーティストが、ロビー空間に登場しています。ここでの成果は沖縄の風土のように、ゆるやかでのびやかな連携でした。対してＪＲ北海道・新千歳空港地下駅（1992）でのデンマーク鉄道との共同チームは、ローカリティの演出ではなく、目に見えるエレメントすべてをひとつの思想できちんとマネジメントしようするという精神で臨んだ成果です。

最近、阿部紘三氏（プロダクトデザイン）、安東孝一氏（アートプロデュース）と小さな本「見えるもの　見えないもの」を出版しました(集英社刊)。展示会や有明パークビルでの彼らとの共同の延長線上にある「本という作品」です。異なる分野の人間が出会うといろいろな可能性が生まれる。実はそんなことを示した本でもあるのです。



アーノルディ氏による有明パークビルのアートワーク



有明パークビル・アトリウムにて（中央左・安東孝一氏、中央右・私、右端・アーノルディ氏）

時代の華一輪

aaca事業委員
造形家
KIYOMI NAKAMURA
中村　清美
TEL03-3939-6530

「クロイスターズを訪ねる」

メトロポリタン美術館の別館であるクロイスターズを訪ねた。

クロイスターズとは修道院のような隠遁の場所、その歩廊、回廊、中庭のことを意味するそうだ。

ニューヨークの地下鉄、190stの駅を出るとすぐ目の前にフォートトライオンパークがあり、この公園の敷地の中にそれはある。ハドソン川の素晴らしい眺めを左手に見ながらなだらかな丘を登って行くと間もなく、クロイスターズが見えてくる。

教会音楽の流れる静かな館内に入る。ここは中世ヨーロッパの建築と美術、工芸が収蔵されているがクロイスターズその建築自体も展示品のようだ。

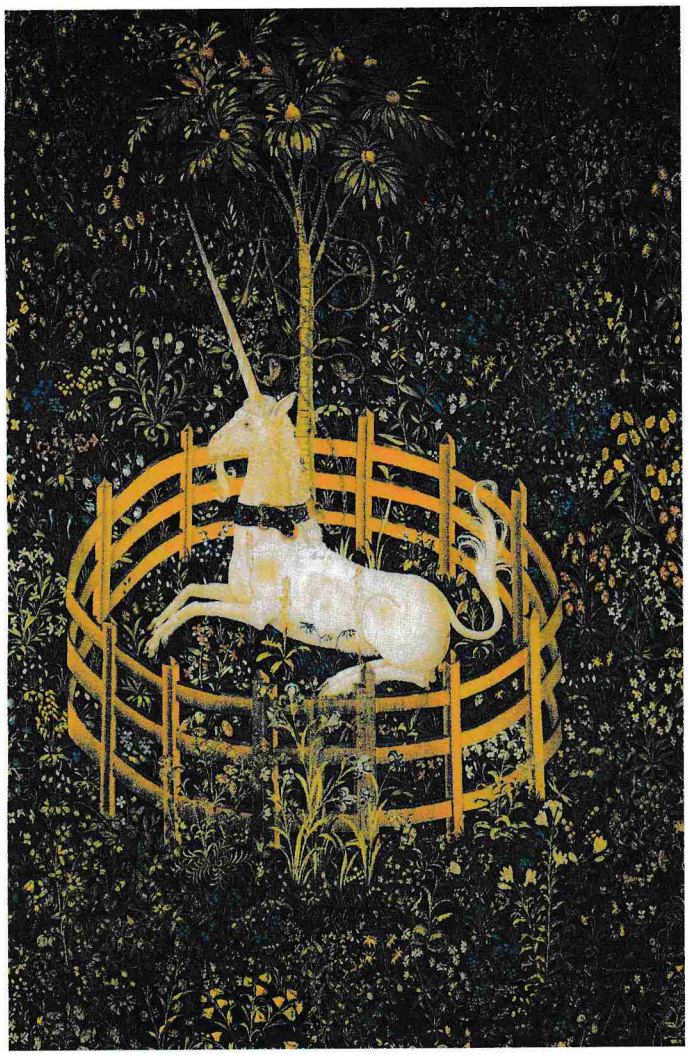
12世紀から16世紀の中世ロマネスクホール、初期、後期ゴシックホール、サンギエムの回廊、キュクサの回廊、フェンティドウニャの礼拝堂などと並び見事なつづれ織りのタペストリーがある。私の第一の目的はタペストリーを見ることで、ここにある作品は古典的なものだが改めて確認するよい機会を得た。

作品の一つは「9人の勇士によるタペストリー」中世後期フランスで制作されたセットである。異教徒の9人の勇士が一緒に描かれているテーマそのものと共に珍しいものだ。

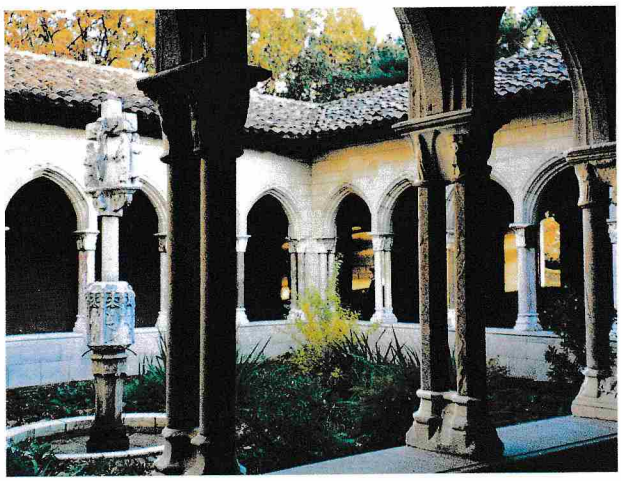
二つ目の作品は「ユニコーンのタペストリー」16世紀ブリュッセルで制作されたものだ。狩人が一角獣（ユニコーン）を追いつめ生けどる迄を描写した有名な大作だ。

テーマとは別に当時、このタペストリーの制作に費やされた時間や職人の数、特に技術の高さに感激する。長い歴史の時間の経過と今もこうした幸運な場所に設置され先達の仕事が大切に保存されているさまを、飽きることなく眺めていた。

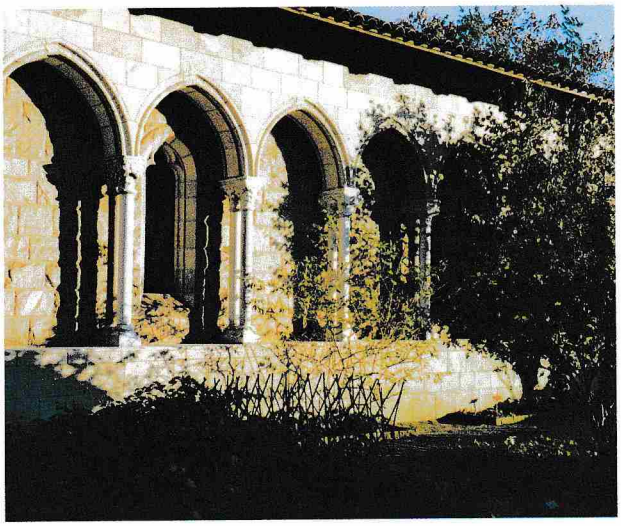
夕暮れのハドソン川の流れと、公園から差し込む光がステンドグラスを通して私にやさしく不思議ななつかしさを肌に感じさせた。そして、ここがニューヨークであることにもまた、不思議さを感じた。



ユニコーンのタペストリー



中庭



回廊

大成建設

私たちのいちばんの技術は、
お客様の思いを読み取る技術です。

ひとつの建物、ひとつの施設が生まれるまでには、
数えきれぬほど多くの技術が投入されます。
個々の技術はもちろんですが、何よりも大成建設が胸をはって誇りたいのが
お客様の思いを読み取る技術です。
私たちはご利用いただく方の率直な声から引き出された
真のニーズをしっかりと把握し、すべてのプロセスに反映させながら、
大きな満足を創造します。